

隣接民家が浸水したため急遽行ったものである。先ず取水口前面を濠内六・五メートルまでを浚渫、次に濠内流水路として堤沿に浚渫した。一次工事の調査で原初の濠底の一部を確認したが、堤裾は確認出来なかった。一次浚渫の採集出土品は埴輪一九片、土師器一九片、平瓦四片、筒瓦二片、瓦器・陶器・磁器・下駄各一片、計四八片、二次浚渫の採集出土品は、埴輪五片、瓦四片、磁器三片、炆器・陶器各一片、計一四片である。

三の宇度墓の調査では、旧堤体とその上の盛土が認められ、採集出土品には、埴輪一三片、瓦器五片、不明品一片、計一九片があった。

四の畝傍山東北陵附属地の市営水路の調査では、長さ五・九メートル、幅三六センチ、深さ三六センチ、木蓋付きの木樋を検出し、橿原市教育委員会と協議して、木樋を取り上げて、千塚資料館で保管することにした。明治中頃の木樋の由。

五の畝傍山東北陵附属地の市営排水管敷設の調査では、約一メートルの盛土下に、池沼面又は水田面と思われる地層を認めた。

六の伏見桃山陵墓地内北参道の調査では、遺構は認められず、攪乱層から瓦一一片を採集した。

七の伏見桃山陵墓地の仮参道設置工事の調査では、遺構・遺物ともに認められなかった。

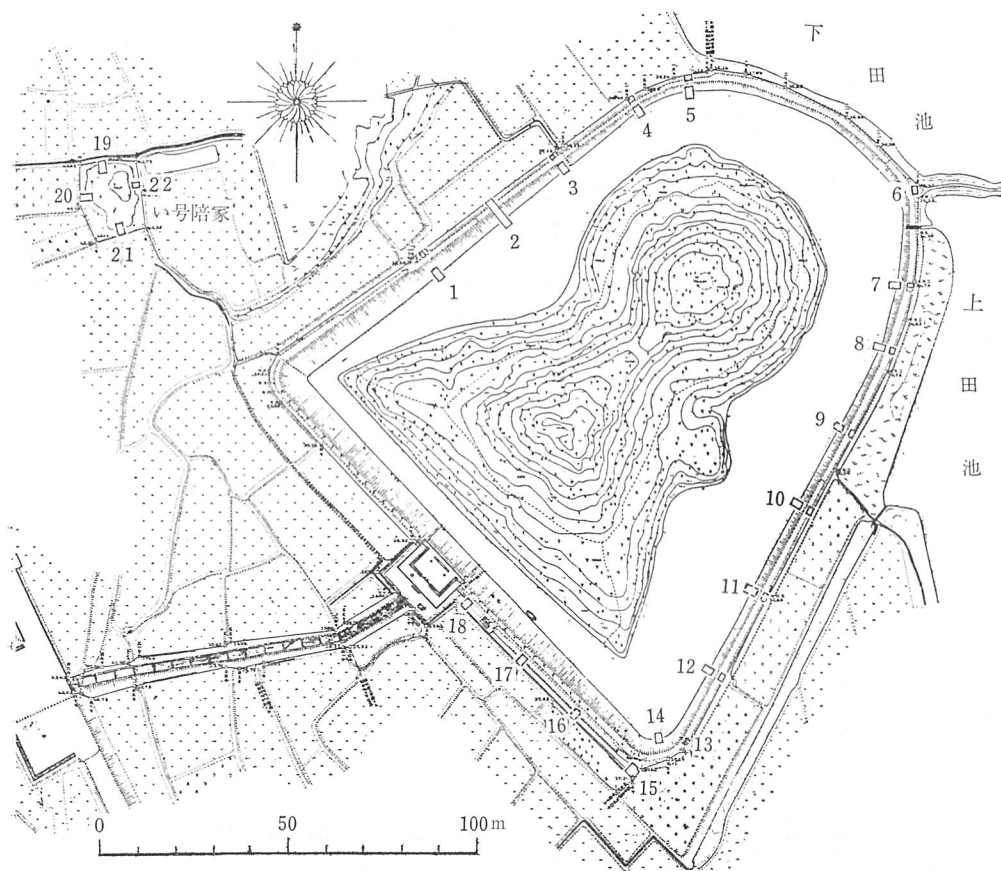
以下一の埴生坂本陵、七の三島藍野陵、三の恵我藻伏岡陵、三の宇度墓、六の伏見桃山陵墓地の各調査の概要を載せる。

(石田茂輔)

埴生坂本陵整備工事区域の調査

仁賢天皇の埴生坂本陵は、古市古墳群の南西の一角に位置し、羽曳野丘陵の北東斜面の裾に築造された大型の前方後円墳である。墳丘は、主軸を東北―南西にとり、水を湛える周濠を繞らす。前方部の東側から南側にかけての外堤上には、旧外堤の外画線を窺わせる地割りが認められる。後円部背後の上田池・下田池は、古市大溝の一部といわれる。下田池の縁の一面には、この陵の外堤上のもと思われる埴輪列、別の一面には奈良時代前期の瓦窯址がある。この陵の前方部北西隅の外堤から至近のところに野々上埴輪窯跡群があり、仁賢天皇陵に埴輪を供給したのではないかといわれる。この埴輪窯と陵域境界の間から埴輪列が発掘され、これもこの陵の外堤を繞るものと考えられている。また、本地の北西方一五〇メートルに、い号飛地(陪冢)がある。

本地及び陪冢の整備工事を行うこととなった。本地においては、外堤内法が経年の波浪による浸蝕が著しいので護岸工事・魚釣りなどの侵入者を防止するために外構柵の取設工事・境界線沿いの急傾斜地の崩落防止のために擁壁取設工事・参道整備のために舗装工事、陪冢においては、侵入とゴミ投棄の防止のために外構柵の取設工事・境界線沿いの急傾斜地の崩落防止のために擁壁取設工事が計画された。そこで昭和五十九年八月二十日から九月十日まで事前調査を行った。この間、梅田甲子郎・



第1図 埴生坂本陵調査箇所位置 (1/2000)

坪井清足・藤田寿雄の各氏に現地地の検分を願い、それぞれ地質学・考古学・土木工学上の指導、助言を頂いた。

事前調査は、本地の外堤内法に幅二メートル、長三〜四メートルの発掘区とその延長上の境界際に幅二メートル、長一・五メートルの発掘区からなるトレンチ一本を設けることとした。ただし、第2トレンチでは、境界際の発掘区と堀側の発掘区とを接続して長八・五メートルとし、第6トレンチでは、既に石積護岸が出来ている外堤内法面に発掘区を設けず、また第14トレンチでは外堤上の発掘区を設けず、かわりにすぐ東方に発掘区を設けて第13トレンチとした。前方部正面外堤の東側の境界沿いには幅二メートル、長三メートルのトレンチ四本を設けることとした。陪冢には、境界沿いに幅二メートル、長三メートルのトレンチ三本と幅一メートル、長一・五メートルのトレンチ一本、計四本を設けることとした。調査の進捗状況等により、第9・11・13・16トレンチの発掘を取止め、第15トレンチを拡張するなどした。

発掘調査の結果、明確な遺構は認められず、第14及び15トレンチで埴輪の混在する性格不明の礫群が検出されたものの、これらも含めて当初予定された掘削工事の範囲にかゝる遺構はなかった。そこで、ほぼ当初の設計どおりの掘

削によって施工することとした。

翌昭和六十年一月八日から三月二十九日までの工事掘削に立会って調査を行った。この立会調査で、第14トレンチ及びその両脇から事前調査時に検出された礫群が出土し、ごく新しいものであることが判明したが、護岸の基礎にかゝるので、念のため設計を変更して保存した。このほかに遺構はなく、予定どおり施工した。

以下、本地と陪家（飛地）に分けて、それぞれの地層・トレンチ内の状況、出土遺物について概述する。

(一) 本地

調査地における標準的な層序は、一応、次のように考えられる。

I 層 表土層。黒色腐植土。旧表土層を含む。

II 層 攪乱層。

III 層 盛土層。堤体の粘土刃金を中心とする。盛土か、次の堆積土か判断に苦しむ地層が多い。またこの層の堀側末端部は浸蝕による崩落土が推積してできたと思われる層に漸移的に変化して界線をひくことができない。

IV 層 堆積土層。有機質分を含む地層、安定のよい礫を多く含む地層、端部が指状を示す地層等、自然の推積を示す。IV層としたもののなかには、有機質分を含む点から自然堆積層と思われる地層が、不自然な層序を示す場合もあり、また、III層と判別できない層もあるが、一応、図に示すように考えてみた。

V 層 地山の大阪層群。

第1トレンチ（第2図1）

このトレンチは、第2～5トレンチとともに、本陵の北西側面の外堤に設けた。

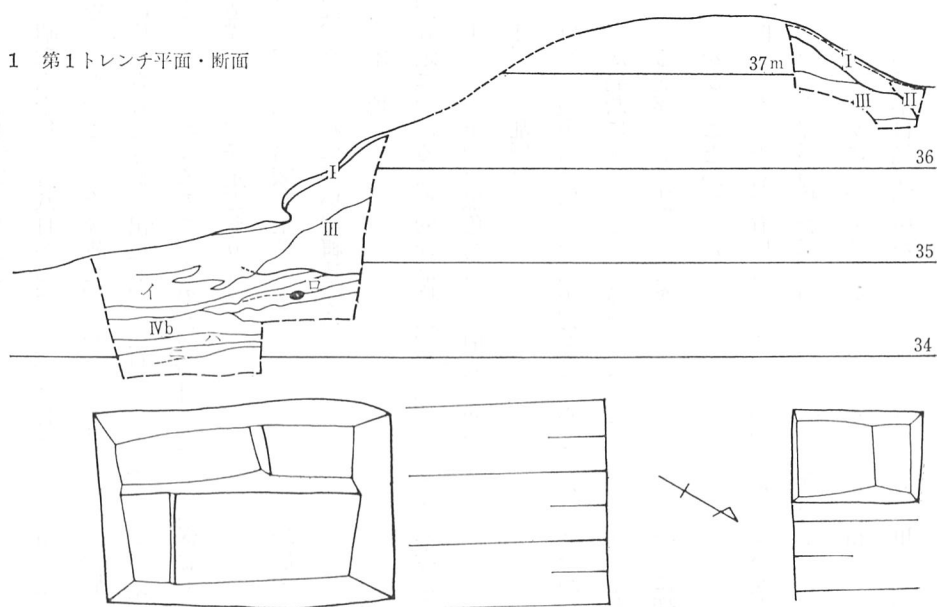
境界際の発掘区では、厚い表土（I）層の下に、堤体を構成する砂質土および砂混り粘土が盛られ（III層）、I・III層の末端は、切られている。III層から埴輪・須恵器の破片が出土した。

堀側の発掘区では、IVb層の上部を掘削して外堤法面とは逆勾配が形成されており、堤体を盛上げるための工夫のようである。IVb層中には、中ほどに小円礫を含むロ層があり、その上部に端部が指状を呈し、有機質分を含むイ層がある。ロ層の下にもほぼ水平で有機質分を含むハ層・ニ層がある。いずれの地層も、その時々には埴底で形成された自然堆積層と考えられる。IVb層からは、埴輪（後掲の出土品の図―以下「別図」と略す―17）・須恵器（35・37）・瓦器（5）の破片が出土している。したがって、当陵築造当初の堤体及び埴底は、遺存しているとすれば、この発掘した範囲よりは下部または境界側にあるものと推測される。この判断は、他のトレンチにおいてもあてはまる。

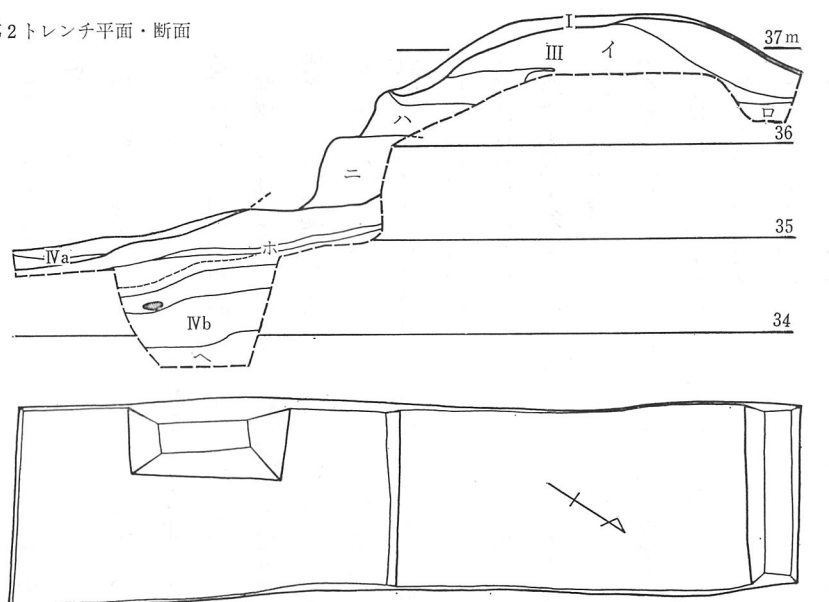
第2トレンチ（第2図2）

このトレンチは、境界際から埴底まで切通して発掘した。堤体の盛土は、第1・3トレンチの状況を参考にすると、ニ層以上と考えられる。イ層は、よく締った灰色粘土（部分的に赤褐色粘土を含む）の刃金層で

1 第1トレンチ平面・断面



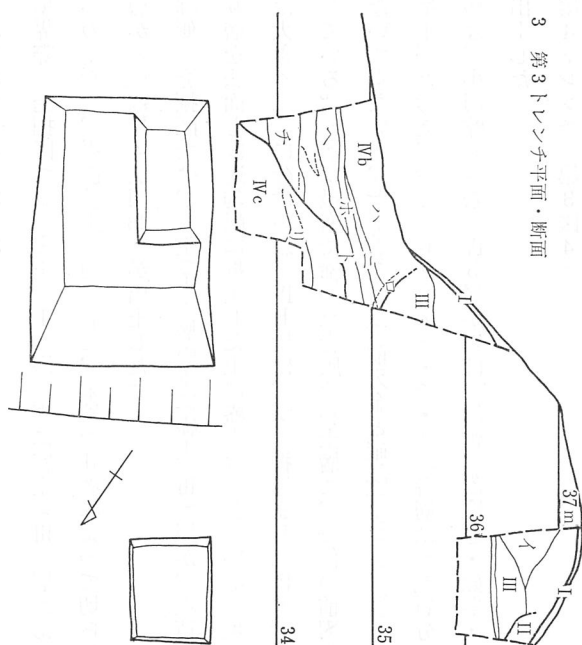
2 第2トレンチ平面・断面



0 2 4 m

第2図 埴生坂本陵本地トレンチ平面および断面(1) (1/80)

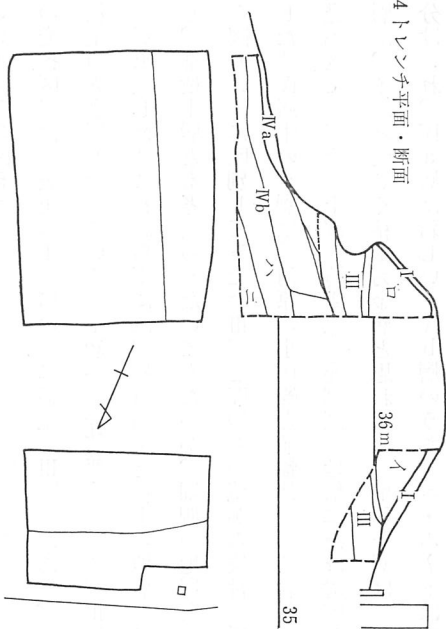
3 第3トレンチ平面・断面



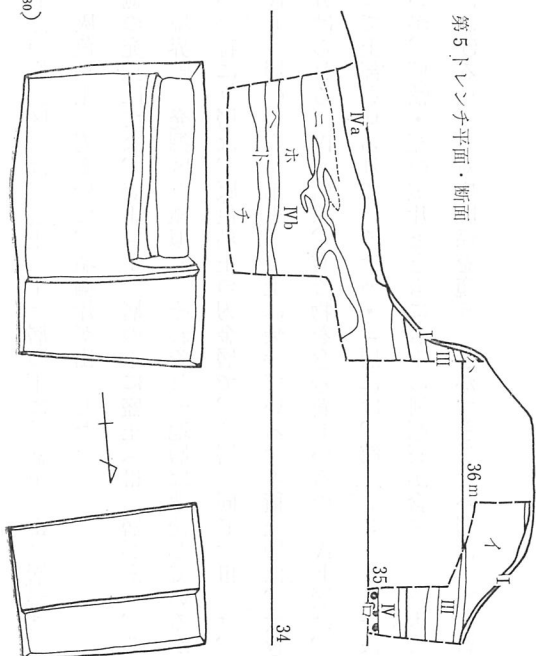
6 第6トレンチ平面・断面



4 第4トレンチ平面・断面



5 第5トレンチ平面・断面



第3図 埴生坂本陵本地トレンチ平面および断面② (1/80)

ある。埴輪・須恵器の破片が出土した。ロ層とハ層とはよく似た灰白色粘土で、同一地層かも知れない。IV a層は、まだ腐植しきらぬ木葉などを含む、ごく新しい堆積土層。IV b層のうち、ホ層は安定した河原石の小円礫を多量に含み、立会調査によって第1トレンチのロ層と連続すること、とくにこの第2トレンチ付近に小円礫が顕著であることが確認された。このホ層及びその上下層からは、埴輪（別図19）・土師器（2）・須恵器（38）・瓦の破片が出土した。ヘ層は、有機質分を含み、よく締っている。

第3トレンチ（第3図3）

境界際の発掘区では、表土（I）層の下に盛土（III）層があり、そのなかのイ層は、灰色粘土の刃金層で、末端をII層によって切られている。III層から埴輪片（別図33）が出土した。

堀側の発掘区では、表土（I）層の下に盛土（III）層が、堆積層であるIV b層を法面とは逆勾配に掘削した上に盛上げられている。堆積土（IV）層は大きく二層に分けられ、IV b層は、深く掘込まれたIV c層の上に堆積している。ハ層は緻密で締った青灰色粘土層で、堤体の前刃金を思わせないでもないが、他のトレンチで前刃金と確認できるものがないので、堆積土層と考えておく。ロ・ニ・ヘ・チ・リの各層は有機質分を含み、ト層は、小円礫を含む。IV b層からは、埴輪（別図13）・磁器・瓦の破片が出土した。

第4トレンチ（第3図4）

境界際の発掘区では、表土（I）層の下に、盛土（III）層があり、イ層は、灰色粘土の刃金層で、埴輪片が出土した。

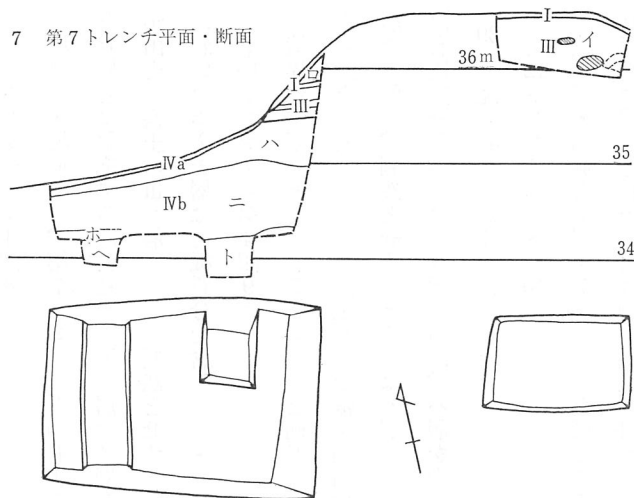
堀側の発掘区では、表土（I）層の下に盛土（III）層があり、その様相は、境界際の発掘区と極似し、それぞれの地層は連続しているかも知れない。特にロ層は、灰色粘土の刃金層で、イ層と同じ。III層は、堆積土（IV b）層の上面を削平した上に乗っている。堆積土層は、大きく二層に分けられる。IV a層は、有機物を含む新しいもの。IV b層は、III層によって上部を切られている。ハ・ニ層には、第1～3トレンチほどではないが、埴輪・瓦の破片とともに若干の河原石が含まれ、三本のトレンチにおける地層の対応関係を窺うことができる。ハ層は、有機質分を含む。

第5トレンチ（第3図5）

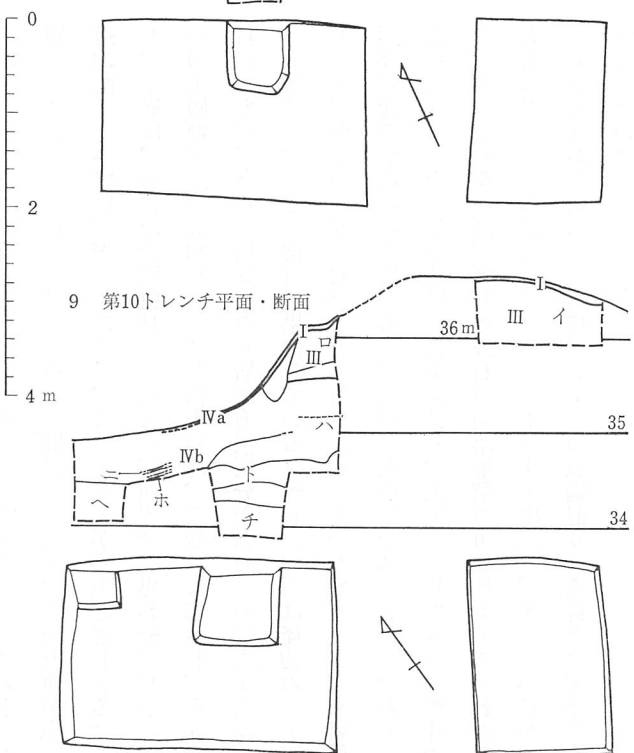
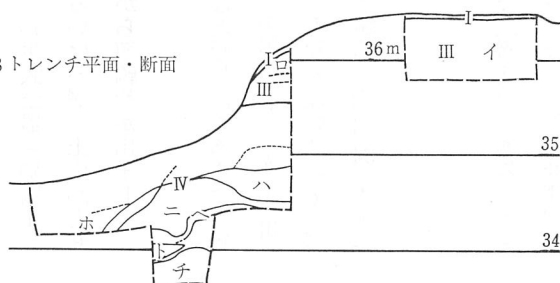
境界際の発掘区では、表土（I）層の下に盛土（III）層があり、イ層は、灰色粘土の刃金層となっている。I層から瓦器（別図4）、III層から瓦（43）が出土した。これから下には、砂質粘土と粘土の地層がほぼ水平に走り、堆積土層とも考えられないでもないが、堀側の地層との対応関係から図のように区別してみた。III層とIV層との境から染付の磁器片が出土した。IV層中のロ層は、河原の小円礫と埴輪片を多く含む。

堀側の発掘区では、その上部が境界際の発掘区の地層にほぼ対応し、III層のハ層は、イ層と同じく粘土刃金層と思われる。堆積土層は、大きく二層に分けられ、IV a層は新しい。IV b層のうち、ニ・ホ・トは有機

7 第7トレンチ平面・断面



8 第8トレンチ平面・断面



第4図 埴生坂本陵本地トレンチ平面および断面(3) (1/80)

質分を含む。ホ層の上面は不自然で、Ⅲ層も含めて考え直す必要があるかも知れない。ホ層からは瓦片(別図42)が出土した。

第6トレンチ(第3図6)

第6・8・10・12トレンチは、当陵の南東側面の外堤に設けた。

このトレンチは、境界際だけに発掘区がある。表土(Ⅰ)層の下には、かたく締った灰色粘土の刃金イ層を含む盛土(Ⅲ)層がある。

第7トレンチ(第4図7)

境界際の発掘区は、第6トレンチと同じ状況である。

堀側の発掘区では、ロ層が、イ層に対応するとみられる粘土刃金層である。盛土(Ⅲ)層の下部が判別しにくく、ニ層の上面の埴寄りに掘削面を推測させる逆勾配が認められ、ハ層が緻密な灰色粘土で、締りも堅く、堤体内法の前刃金とも考えられるので、ハ層から上がⅢ層かも知れない。堆積土層は大きく二層に分けられ、Ⅳa層はごく新しい。Ⅳb層中のニ・ト層は、有機質分を含む。ハ・ニ層から埴輪片が出土した。

第8トレンチ(第4図8)

境界際・堀側とも、第7トレンチと同じような地層状況である。イ層とロ層とは対応する灰色粘土の刃金層。イ層から弥生式土器(別図1)が出土。盛土(Ⅲ)層の下面は判然とせず、あるいはハ層の上面かも知れない。ホチ層は有機質分を含む。ハ・ニ層から埴輪片が出土した。

第10トレンチ(第4図9)

境界際・堀側とも、第7トレンチと同じような地層状況である。イ層とロ層とは対応する粘土刃金層。埴輪(別図18)が出土した。盛土(Ⅲ)層の下面は、判然とせず、あるいはハ層の上面かも知れない。ニチ層は有機質分を含む。IVb層からは、ハ層を中心に埴輪(別図34)・炆器(39)・瓦(41)の破片を出土した。

第12トレンチ(第5図10)

境界際・堀側とも、第7トレンチと同じような地層状況である。イ・ロ両層は、灰色粘土の刃金層。盛土(Ⅲ)層の下面は、判然とせず、緻密な灰色粘土からなるハ層は、堤体の前刃金とも考えられ、ホ層の上面がⅢ層の下面かも知れない。堆積土層は、二層に大別され、IVa層は新しいものである。IVb層のニ・ヘチの各層は有機質分を含み、特にト層は漆黒色を呈する。ハ層から埴輪(別図16・21)・瓦(45)の破片、ヘ層とその上下の層から埴輪片(9・11・12・20・22・25・26・31・32)が出土した。

第14トレンチ(第5図11)

このトレンチは、前方部正面東南隅の外堤内法に設けた。表土(Ⅰ)

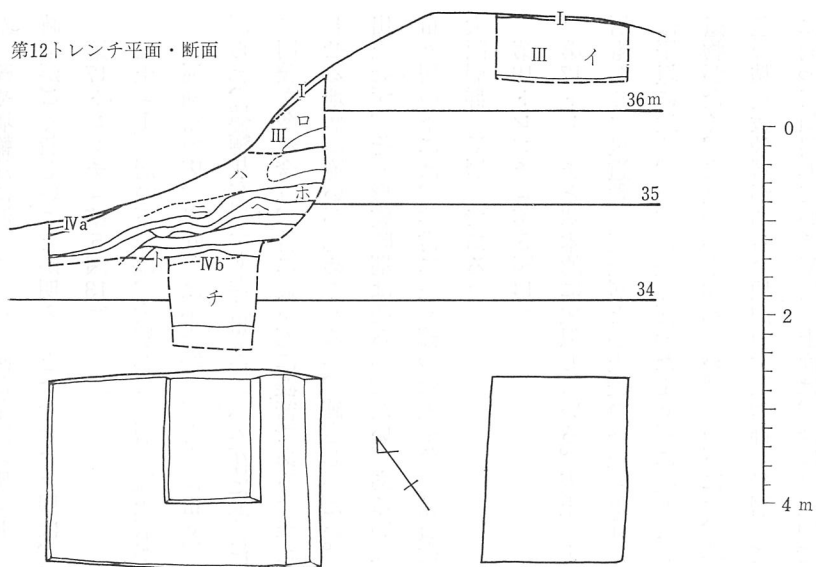
層の下に盛土と思われるⅢ層がある。Ⅲ層の下面は、イ層上面が法面と逆勾配となっていて掘削面に見え、これから上が盛土と思われる。しかし、イ層は、緻密な青灰色粘土からなり、前刃金を思わせ、ロ層の上面が盛土層の下面かも知れない。堆積土層は、二層に大別され、IVa層は新しいものである。VIb層のロ層は有機質分を含む。ハ層を中心にその上下層には、多くの礫石が累積している。礫石は、大は径約六〇〜四〇センチ、小は約一五〜七センチの角がまるくなったもので、その累積状態は、比較的に安定しているが、特段の秩序は認められない。礫石の上はもとより、その下や間には粘土があり、大型の破片を含む埴輪片を包含する。この礫群は、はじめ葦石の崩落堆積の可能性も考えられたが、立会調査時に礫石に混ってコンクリート片が出土し、礫石の累積がごく新しいことが判明した。第15トレンチの埴輪混りの礫群との関連性も無視できない。

第15トレンチ(第5図12)

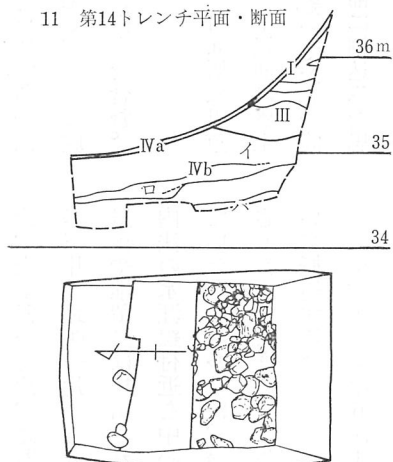
第15・17・18トレンチは、前方部正面の南東部外堤の境界際に設けた。

このトレンチは、第14トレンチの延長上に近い境界際に設けた。表土(Ⅰ)層は、里道の走る西南部が厚くなっている。この下に盛土層が少なくとも二層ある。Ⅲb層のイ層は、よく締った黄色ないし黄白色の粘土で、埴輪片(別図10)・小円礫を少なからず含んでいるが、その下のロ層にはそれ以上に多くの埴輪片(別図6)と小円礫が含まれている。一見、

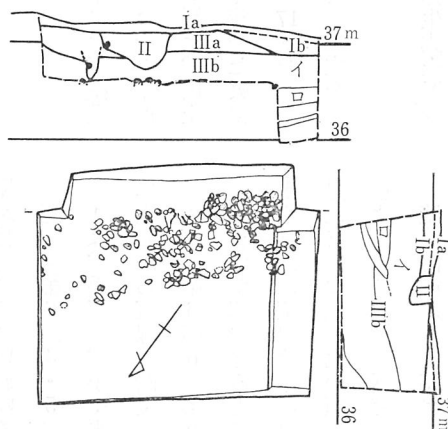
10 第12トレンチ平面・断面



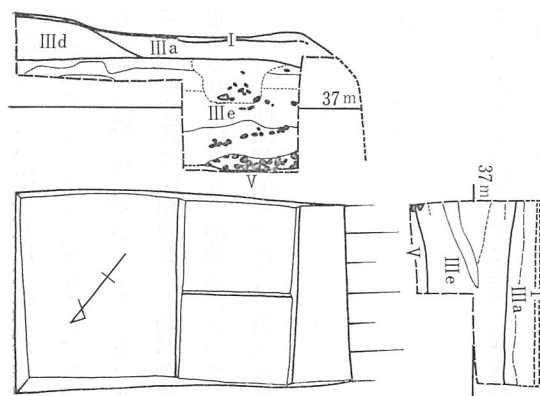
11 第14トレンチ平面・断面



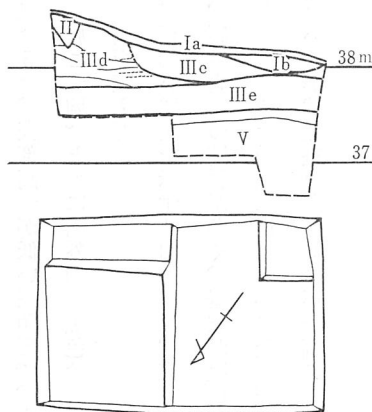
12 第15トレンチ平面・断面



13 第17トレンチ平面・断面



14 第18トレンチ平面・断面



第5図 埴生坂本陵本地トレンチ平面および断面(4) (1/80)

原初の外堤上面に列立した埴輪がつぶれて散乱したかのものであったが、礫や埴輪片に混って染付の磁器茶碗（別図40）が出土し、その形成時期がごく新しいことが明らかとなった。ロ層は、黒色腐植土を含む。

第17トレンチ（第5図13）

表土（Ⅰ）層の下には、大別して三層の盛土層がある。Ⅲa層は里道及び巡回路の床、Ⅲd層は小土堤で、ともにⅢe層上面の平坦面に盛上げられ、埴輪片を出土した。Ⅲe層は、全体に非常に堅く締っており、間に円礫を多数含み、特に最下部に濃密である。ただし一部に掘込みを思わせる地層の違いが認められるが、確定しがたい。Ⅲe層からは遺物が出土せず、その形成時期は明らかでない。あるいは自然層であろうか。Ⅲe層の下には、非常に堅く締った灰褐色の粘質微砂層がある。地山の大阪層群（Ⅴ層）である。

第18トレンチ（第5図14）

第17トレンチと基本的に類似している。表土（Ⅰ）層の下には、攪乱層もしくは里道敷の埋土層と小土堤の盛土（Ⅲd）層がある。その下面は平坦に近く、非常に堅く締ったⅢe層に接している。Ⅲe層は、出土遺物がなく、自然層かも知れない。その下には、非常に堅く締った灰褐色の粘質微砂層がある。地山の大阪層群（Ⅴ層）である。第17トレンチに向って傾斜しているⅤ層の上面は、ほぼ直線的であることが、立会調査によって確認された。

本地で採集された遺物は、大部分を占める埴輪のほか、弥生式土器一

片、土師器一〇片、瓦器四片、須恵器一四片、炆器五片、陶器一片、磁器三片、瓦四一片など計一、五九二片である。今回の調査では、原初の遺構や堆積層は検出されず、これに伴う遺物は採集されなかった。外堤内法の水涯線付近を中心にそれより下の遑底には相当数の遺物が散布していた。その多くは、堤体中に包含されていたものが波浪によって洗出されたものである。以下、これらの表面採集品も含めて、出土品について概述する。

弥生式土器（第6図1）

表面に粗い叩き目を施す。第五様式の甕。

土師器（第6図2・3）

2は、中近世の手捏ねの皿、3は、内外面を横方向に撫でる。外面に煤が付着する。いわゆる炮烙塙の類であろう。

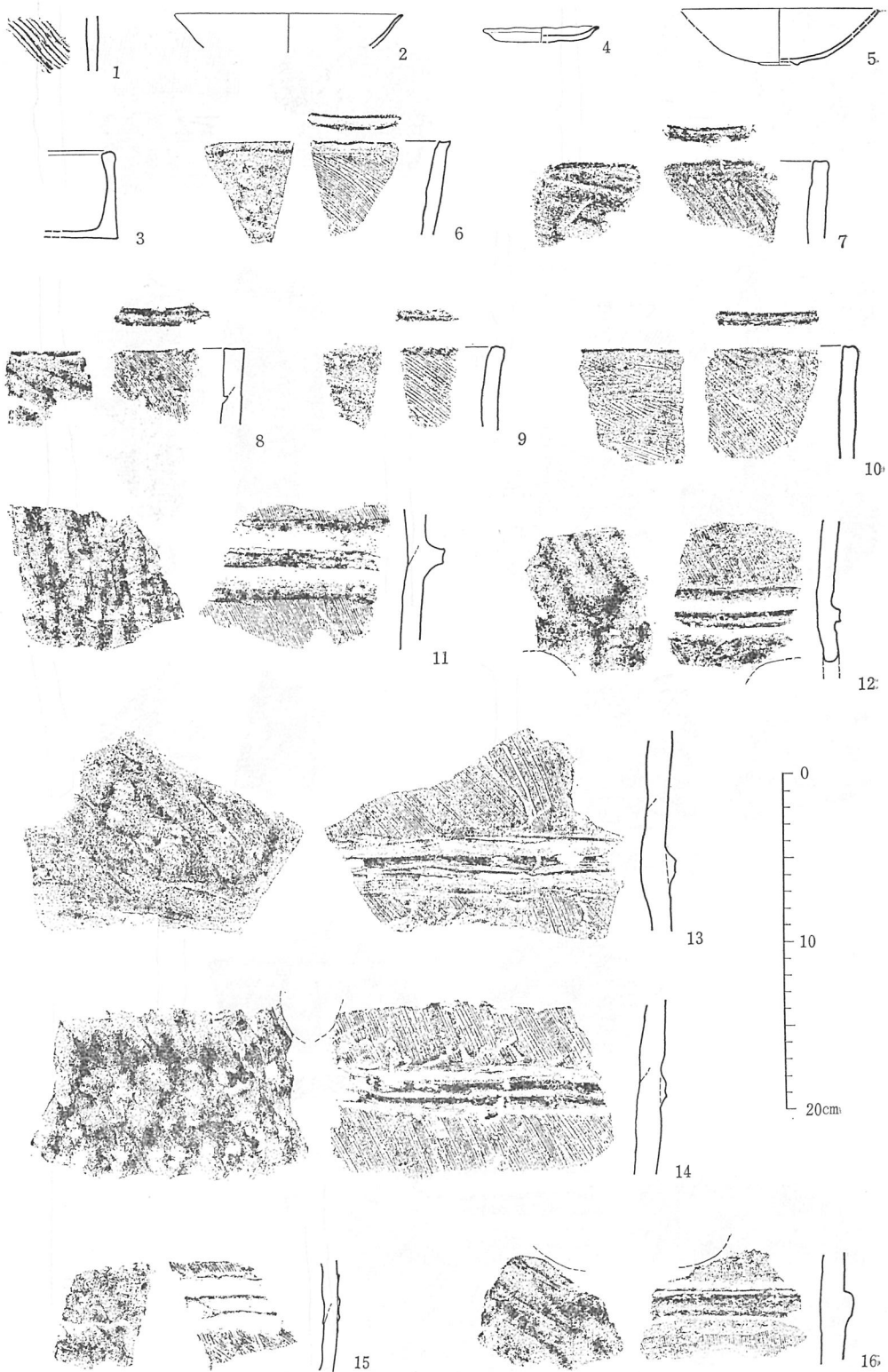
瓦器（第6図4・5）

4は、手捏ね、小型平底の皿。5は、底部高台が低い三角形で、内面に中心から直線の暗文を疎らに施す。ともに内外面淡黒色。

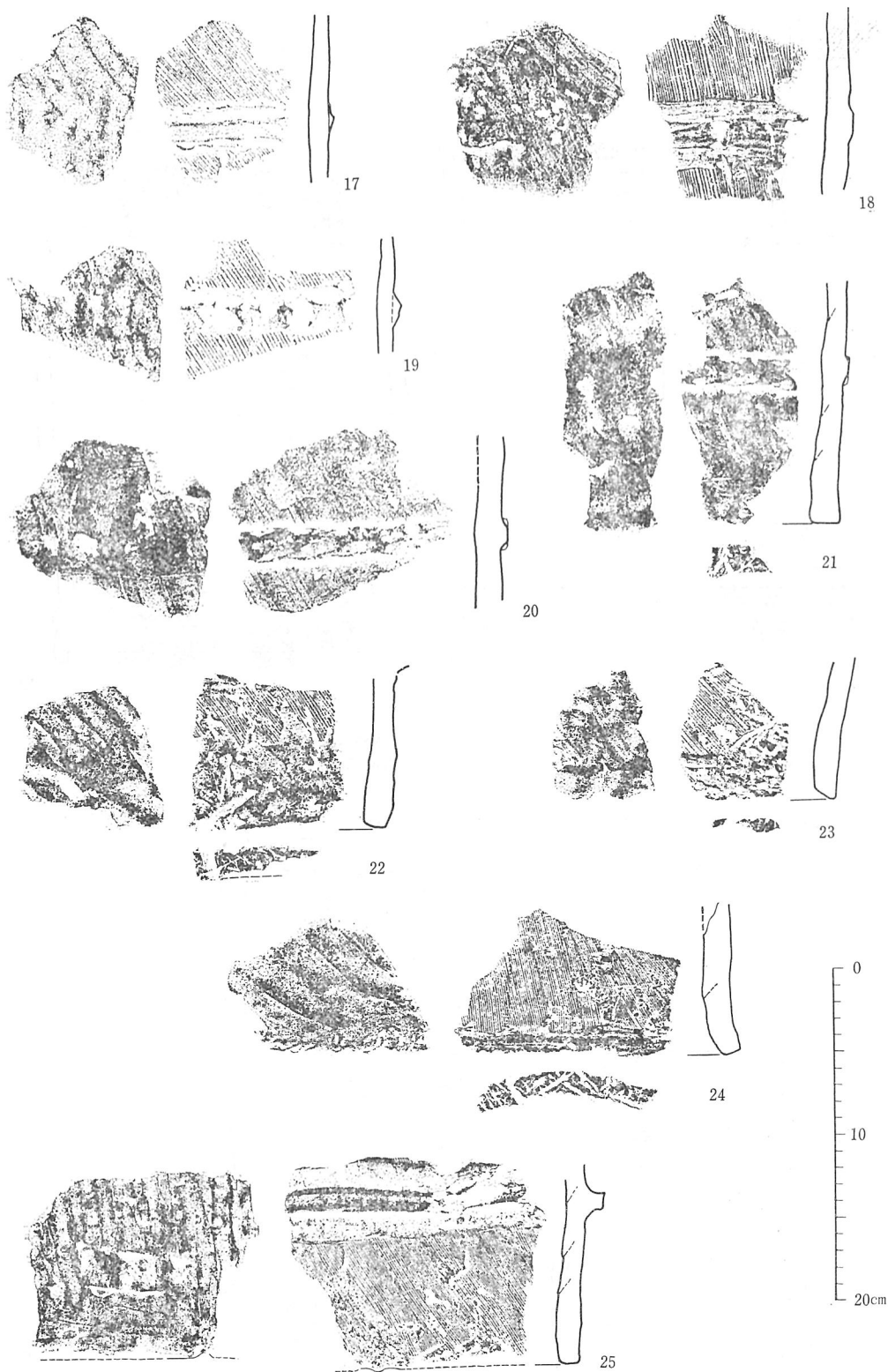
埴輪（第6図6～第9図34 図版三～五）

調整の確認できるものは全て新しい様相を示す。内外面は、橙色・黄褐色または黄白色系の色調で、硬軟両様の埴質が多く、器肉が灰色・灰黒色または黒紫色の須恵質のものもある。胎土に白色の小さな砂礫を含む。ほかに、調整痕を失ってはいるが、黒斑のあるものが一例ある。

埴輪円筒（6～25）



第6図 埴生坂本陵本地の出土品(1) (1/4)



第7図 埴生坂本陵本地の出土品(2) (1/4)

口縁部は、外面を斜の刷毛目、内面を斜の撫でで調整する（6・9）。10の内面は斜の刷毛目の上に横の撫でを施す。端部は上面を強く撫でるほか、内外両面（6）または外面（7）をも撫でる。

胴部は、普通内面を指でおさえた上を斜に撫でつけ、外面は斜の刷毛目を施し、突帯を貼付ける。内面の撫でつけは、左上りが多いが、縦に近いもの（11）・横（13）・右上りの斜もある。20の外面は斜の撫でつけのみ。突帯は、11のような突出したのは少なく、低平で、稜がまるく、上下端に粘土が張出したまゝのが多い。19・20は、粘土紐を指でつまんだ跡を残し、16の上端は工具の角をあてて引いている。透孔は、不整形で、12は切削の後、外面に及ぶ撫でを施す。

基底部は、内外両面を斜に撫でつけたまゝの21・外面のその上に斜の刷毛目を施す22・基部を更に横に撫でる23・刷毛目の前後に横の撫でを施す24がある。基部の内面は、指おさえのほか、横に撫でた例25もある。

形象埴輪（26・34）

すべて部分的な破片で、何を象どったか知られるものはない。26は、三角形に近い板状のもので、図に記すとおり剥離痕がある。27は円柱状の端部。28は、板状で、両面に刷毛目を施し、小口と両側面を切削して一部に撫でを施す。29も、28と同形であるが、両面は撫でつける。30は、断面L字形を呈し、図の側面に一孔を穿って粘土をあて、その裏面に粘土を貼付けるが、今はともに剥落している。上面の一端に粘土を貼付けた痕跡が認められる。厚手の造りである。31は、隅丸方形をなすかと思

われるコーナー近くの厚手の破片で、大きな突帯を繞らすが、剥落した部分に刷毛目調整痕を残す。32は、盾形かと疑われる破片で、両面に乱雑な刷毛目を施し、側面は切削した上を撫でる。33は、表面に、縦・横・斜の直線を刻む。黒斑がある。34は、図に示すように動物の頭と考えられる破片で、眼と耳を円孔で表わし、頰の下部に粘土板をそえる。

須恵器（第9図35・38）

35は、坏蓋で、天上部外面に篋削りを施す。36は坏身で、浅く、底部外面に篋削りを施す。受部はわずかな窪みから水平にのびる。37は、台付長頸壺の脚台部で、中程で屈曲して稜をつくる。いづれも七世紀中・後葉。38は、甕の胴部と思われ、内外面に叩き目が見られ、外面には更に掻き目を施す。

炆器（第9図39）

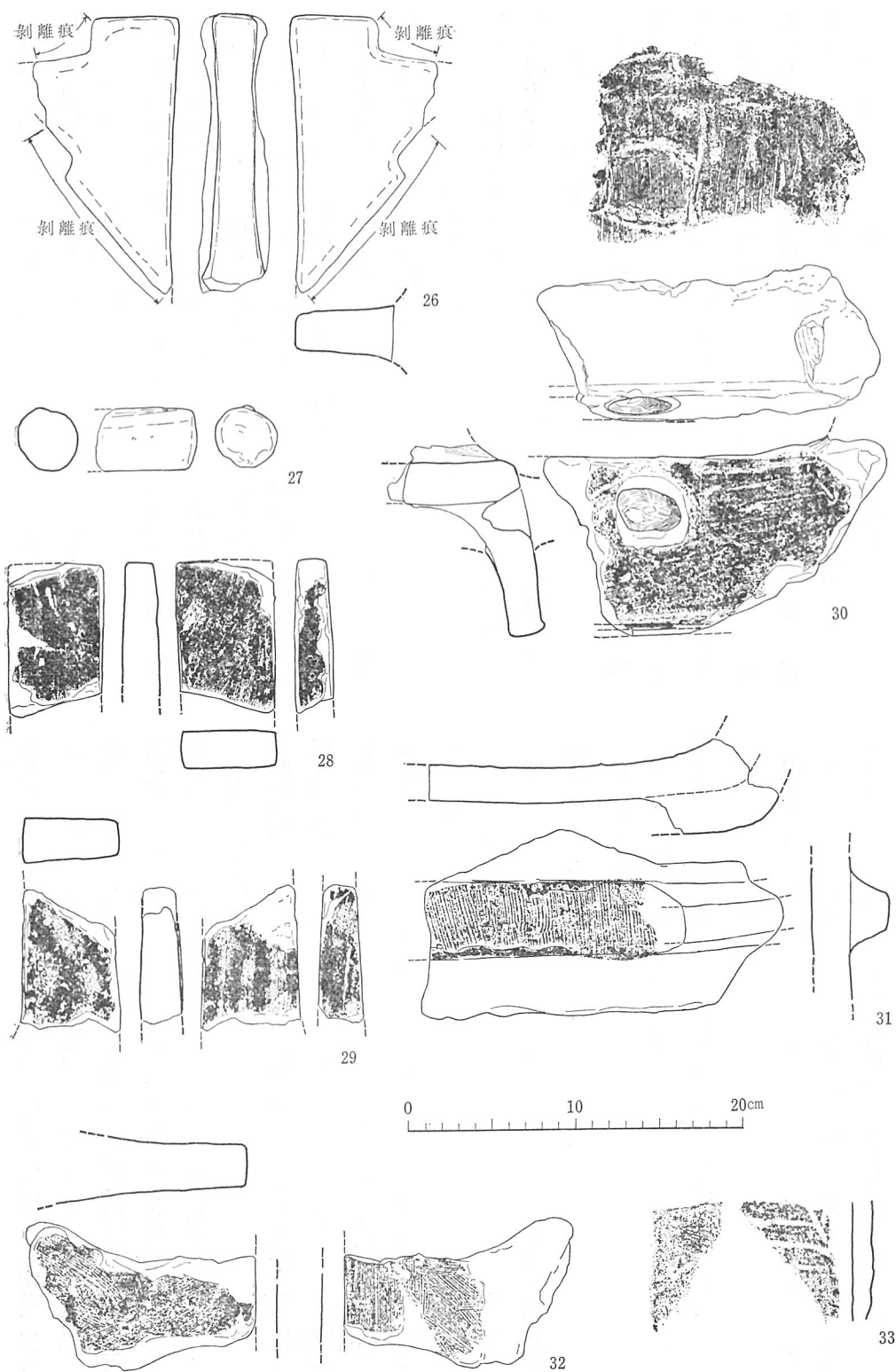
39は、摺鉢で、卸目を胴部内面に平行に隙間なく施すが、底部内面には疎に施す。桃山・江戸時代初の備前焼。

磁器（第9図40）

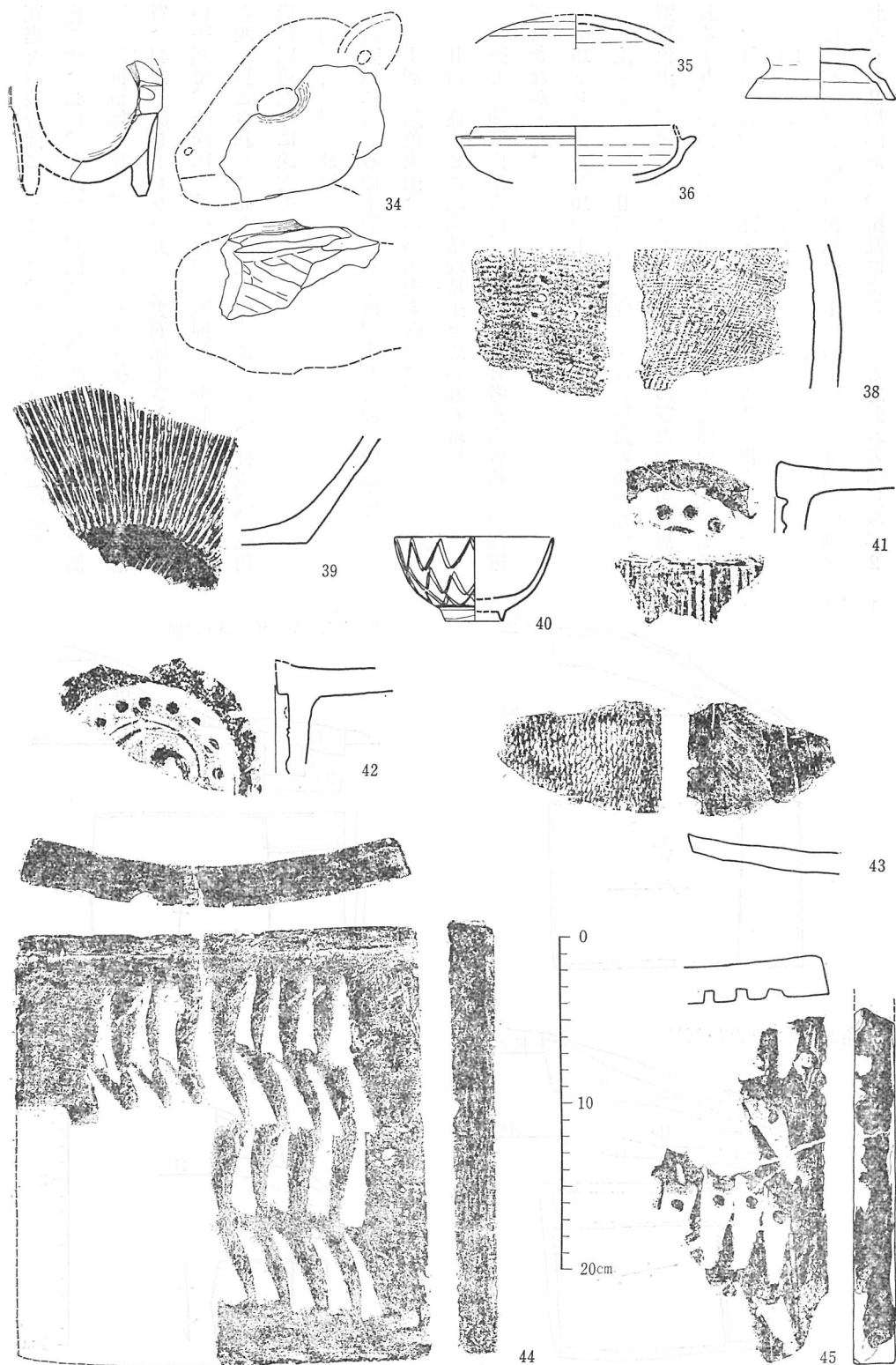
40は、第15トレンチの小円礫と埴輪片とが混在する中から出土した茶碗で、外面に波状文を三段に濁ったコバルトで描く。有田焼。

瓦（第9図41・45）

41・42は、内区を中心に三巴を置き、その外に大きな珠文を繞らし、一段と高くなった周縁は素文で終る鏡瓦。凹凸両面とも灰黒色を呈する。42の筒部凸面は撫でを施して弱い稜が形成され、凹面は布目痕を残す。



第8図 埴生坂本陵本地の出土品(3) (1/4)



第9図 埴生坂本陵本地の出土品(4) (1/4)

瓦当との接合面に沿って撫で、瓦当裏面は方向不定の撫でを施す。43は、女瓦で、凹面に布目、凸面に縄目があり、側面と凹面側縁を削り、これらのうえを撫でる。黒灰色の須恵質。44は、第5トレンチ近くで表面採集された、正方形に近い平瓦で、凸面には、三角形の型押しが少し角度をかえながら四段施こされる。45も同様の手法によるが、押型は、三角形の底辺近くに珠文をおく。

(二) 陪冢(飛地)

調査地における標準的な層序は、次のとおりである。

I層 黒色表土。古い表土も含む。

II層 盛土または崩落堆積土と思われる地層

調査した範囲内からは、墳丘の封土と考えられるものは確認できなかった。

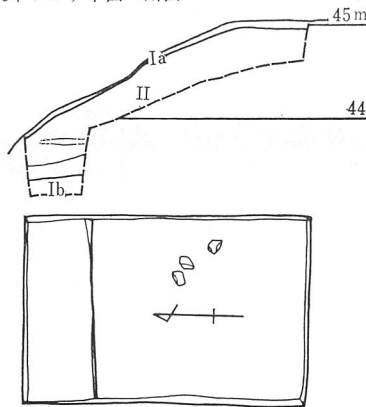
第19トレンチ(第10図1)

表土(I)層下のII層は、粘性の少ない砂質の黄色ないし黄褐色土で、柔らかい。この下に黒味をおびた旧地表と思われるIb層があり、その上面は、側を通る道路面より少し低い。II層から、埴輪・瓦・須恵器などの破片が出土した。

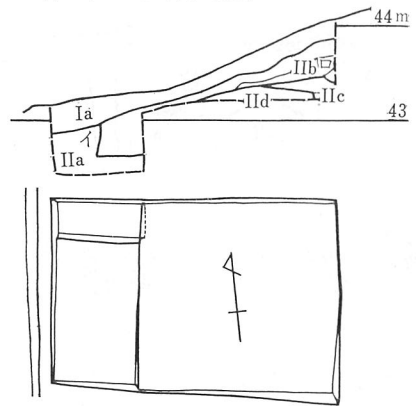
第20トレンチ(第10図2)

比較的に厚い黒色の腐植土(I)層の下には3層に大別されそうなII層があり、攪乱によるものと思われる落込みが2

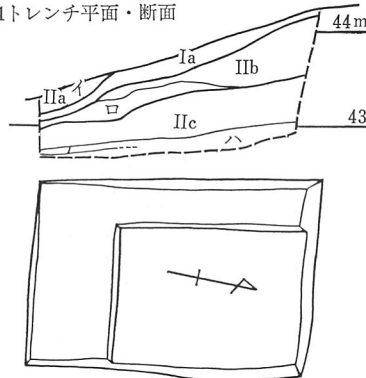
1 第19トレンチ平面・断面



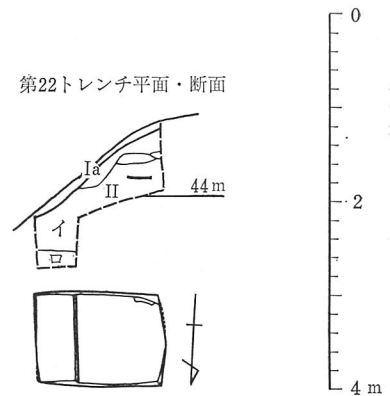
2 第20トレンチ平面・断面



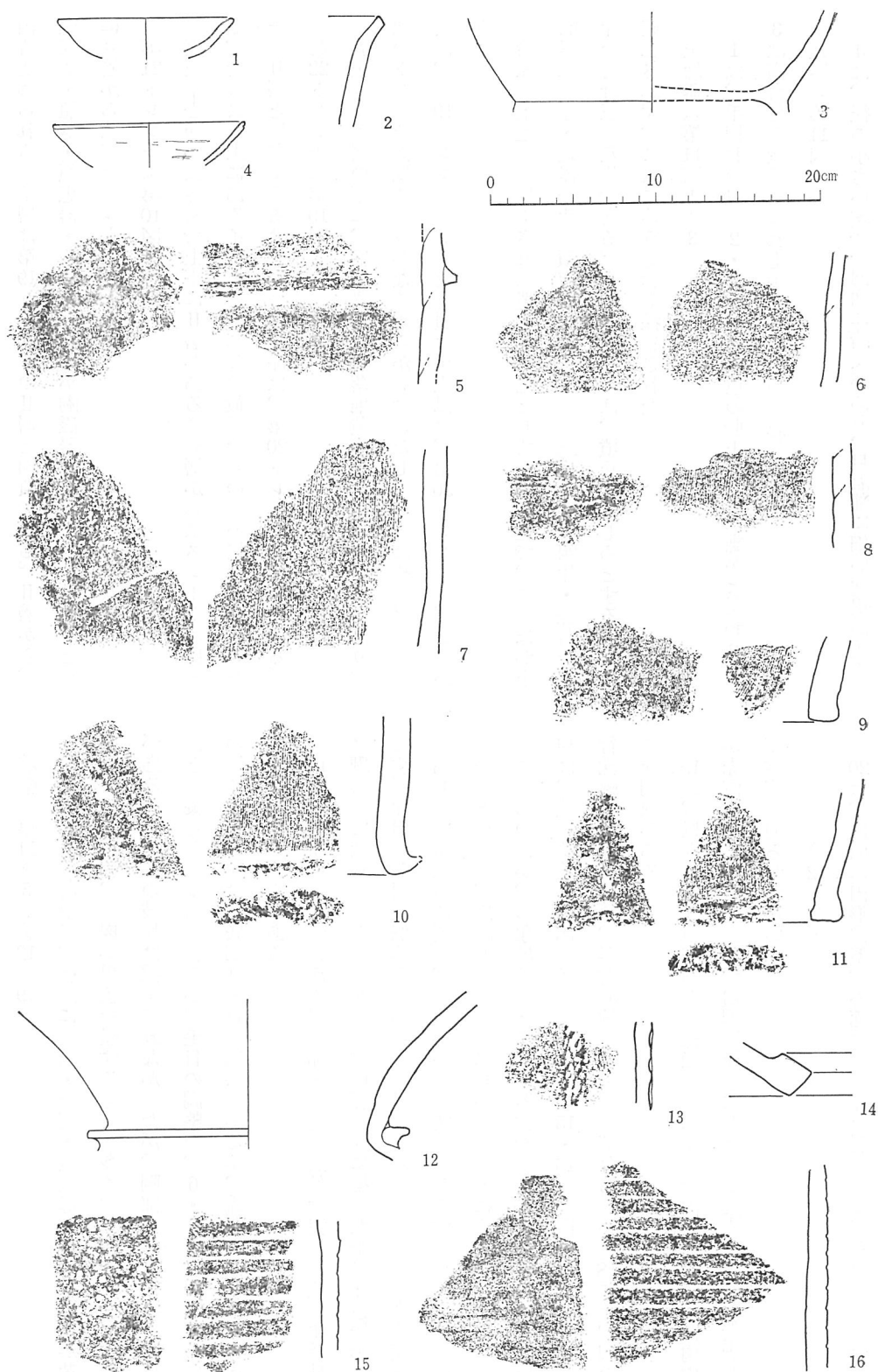
3 第21トレンチ平面・断面



4 第22トレンチ平面・断面



第10図 埴生坂本陵陪冢トレンチ平面および断面 (1/80)



第11図 埴生坂本陵陪冢の出土品(1) (1/4)

箇所認められる。Ⅰ層は第19トレンチのⅡ層と同質である。Ⅱ層から、土師器・埴輪・須恵器・炆器・瓦のほか陶磁器の破片が出土した。とくに口層からはビニールも出土した。

第21トレンチ（第10図3）

表土（Ⅰ）層をはさんで上下にⅡ層がある。口層からはスレートが出土し、それより上にあるⅠ層とともにごく最近のもの。ハ層は第19トレンチのⅡ層と同質である。Ⅱ層の出土品は、第20トレンチと同じである。

第22トレンチ（第10図4）

表土（Ⅰ）層の下に、盛土または崩落堆積土と思われるⅡ層があり、他のトレンチ同様に締りがなく柔らかい。ただし、口層はやゝ堅い。Ⅰ層は、第19トレンチのⅡ層と同質。出土品は、第20トレンチと同様である。

陪冢（飛地）で採集された遺物は、主として埴輪と瓦で、このほか土師器二三片・瓦器一片・須恵器一六片・炆器三片・陶器四片・磁器一四片など計三〇八片である。今回の調査では、墳丘をはじめとする遺構は確認されず、これに伴う遺物も採集されなかった。

土師器（第11図1～3）

1は、手捏ねの皿。2・3は、黄褐色の胎土で、2は甕かと疑われる。3は高台付の壺。いずれも中近世のものと思われる。

瓦器（第11図4）

4は、径の小さい埴で、内面に暗文があり、口唇部に細い沈線が繞る。

埴輪（第11図5～第12図19）

埴輪円筒は、薄手で、胎土に長石・石英・金雲母を含む。器表が黄褐色ないし赤褐色、器肉が黒色を呈するものが多く、5・8・9には黒斑がある。口縁部の破片は採集されなかったが、胴部の5～8は、内外両面とも縦もしくは斜の細かい刷毛目の調整で、6・8の内面はさらに横の撫でを施す。基底部9～11も同様であるが、端部内面に指おさえの痕跡を認めるものがある。

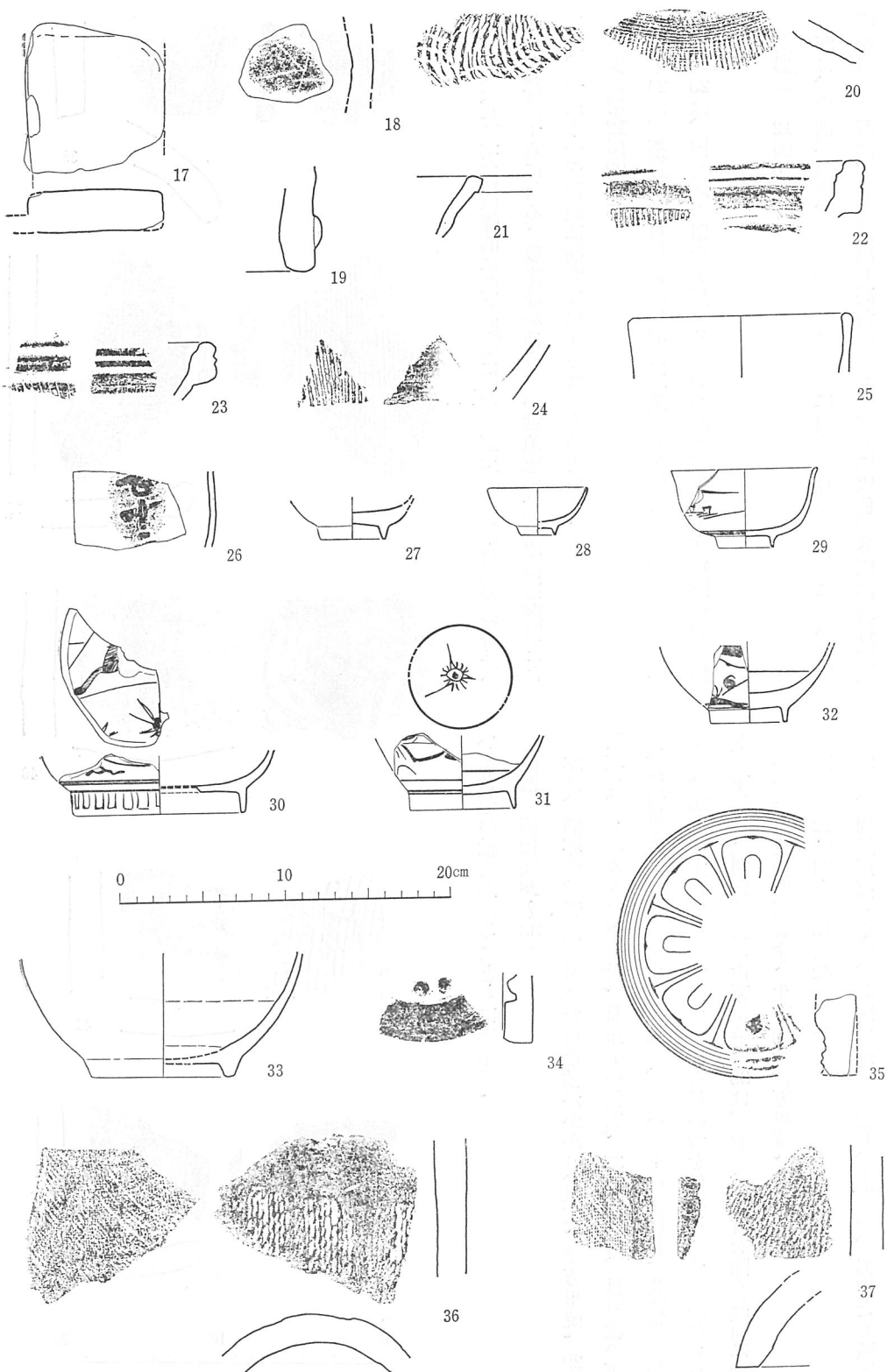
12は、朝顔形埴輪の頸部で、肩部との境に貼付け突帯を繞らす。外面は剥落して調整痕をとどめないが、内面は横に撫でた上に赤色塗彩を施す。伴出した同一個体と思われる口縁部片によれば、外反する頸部から屈曲して斜上方に開き、屈曲部外面に突帯を繞らす。13は、鱗付円筒の破片と思われ、剥離した接合部に短い刻目を密に施す。

これらのほか、形象埴輪があるが、器種を特定できるものは少ない。14は、蓋形埴輪の蓋部の縁と思われる。15・16は、円筒形で、外面に平行沈線を刻む。17は、器財埴輪の縁どりの部分らしい。18には、図のような刻線がある。

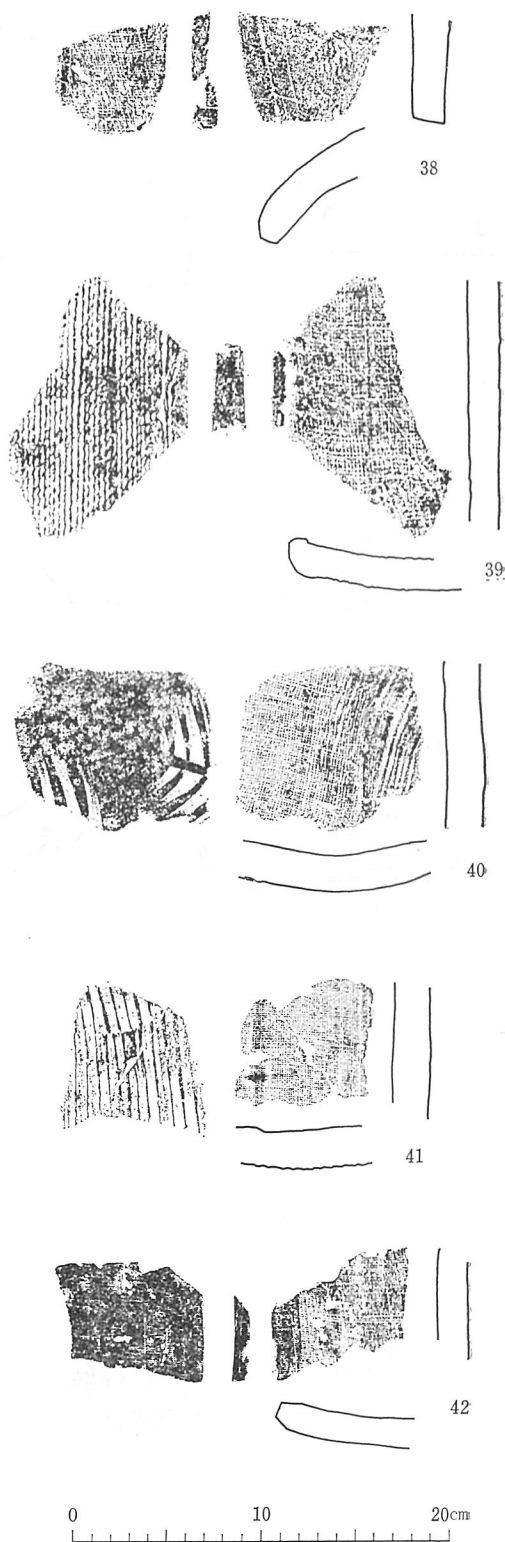
19は、以上の古手の埴輪とは様相を異にする。内外面および器肉内部が赤橙色を呈する基底部で、端部近くに突帯を繞らす。表層が風化して、調整痕は明らかでない。

須恵器（第12図20・21）

20は、内面に円形内型、外面に平行叩き目の上に掻き目を施す。21



第12図 埴生坂本陵陪冢の出土品(2) (1/4)



第13図 埴生坂本陵陪冢の出土品(3) (1/4)

は、鉢で、外上方に直線的に開く胴部に肥厚した突帯様の口唇部を付け、その端部は平らに終る。吸水性がある。中世須恵器、須恵器系陶器とよばれ、一三～一五世紀に播磨で生産されたものという。

炆器 (第12図22～25)

22～24は、摺鉢で、口縁部は外面に二条の凹線を繞らし、内面に段がつく。25は、円筒状の器形を呈する。いずれも、桃山～江戸時代初の備前焼。

陶器 (第12図26・27)

26は、内面が黒色、外面が紫褐色の地に白色の釉を高盛りに置いて文字を書く。27は、埴で削出し高台がつく。内面に灰色、外面に畳付を除

いて黄色の釉をかける。ともに唐津焼。

磁器 (第12図28～33)

28は、酒杯で、青味をおびた白色釉がかかり、無文。伊万里焼。29は、茶碗で、コバルトの下絵付。幕末～明治初。32は、埴で、鉄質釉の下絵付、伊万里焼。31は、埴または鉢で、コバルトの下絵付。化政期の伊万里焼。30は、大鉢または大皿で、蛇の目高台を付ける。鮮やかなコバルトの下絵付。明治時代の伊万里焼。33は、壺で、畳付を除く外面に青味がかった白色釉を施す。化政期の伊万里焼。

瓦 (第12図34～第13図42 図版六)

34は、周縁が高く素文、外区に珠文を配し、表裏面、器肉とも黄灰色

を呈する。35は、単弁蓮華文鏡瓦の小破片で、中房を欠くが、内区に八花弁を配する形式で、弁端がわずかに反転し、弁間を楔形で埋め、各花弁内に高く盛上った子葉を一個づつあてて、周縁は低く、三重の円圈を繞らす。

男瓦36・38は、凹面に布目、凸面に縄目があり、部分的に撫で消されている。側面と凹面または凸面の側縁は、削りまたはその上を撫でて面取りする(37・38)。

女瓦は、凹面に布目、凸面に縄目、側面に削りと撫でによる面取りがある。凸面には、葉脈状(40)・平行線(41)の叩きや平滑な仕上げのもの(42)もある。

以上35・41は白鳳時代、42はこれより新しいかと考えられる。坪井清足氏によれば、白鳳時代の瓦は、調査地の西南方六〇〇メートルの善正寺跡のものと類似しているという。35は、古市小学校が所蔵する善正寺出土と推定される鏡瓦と同じ型式である。^注

(笠野 毅)

注 笠井敏光「古市小学校所蔵遺物整理報告」(『古市遺跡群Ⅱ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書5、羽曳野市教育委員会、昭和五十五年)

三島藍野陵見張所改修区域の調査

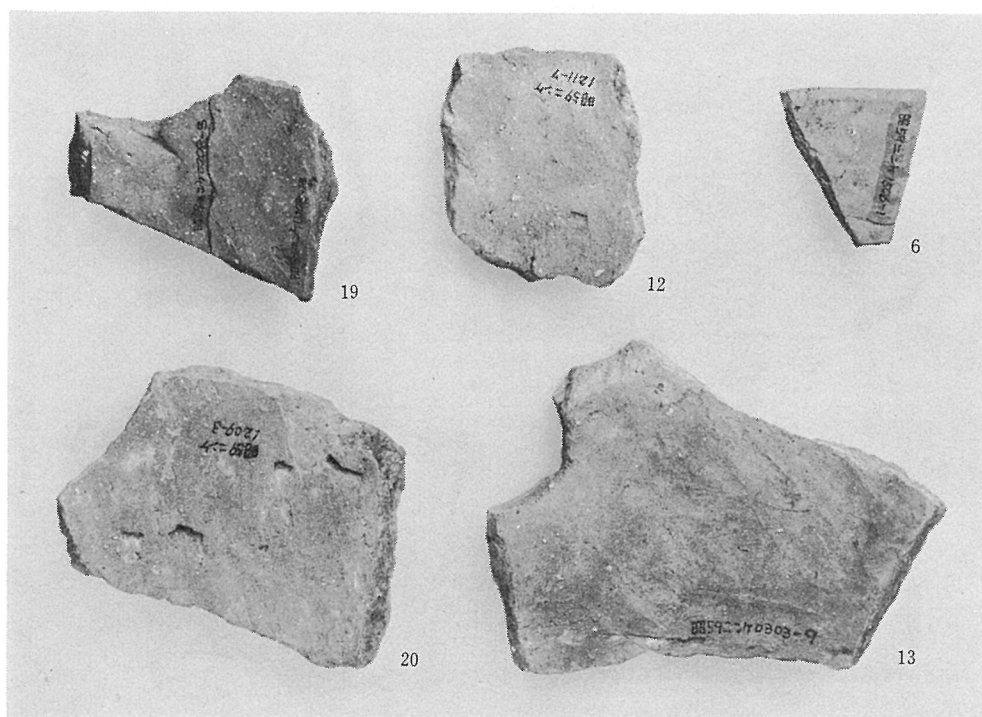
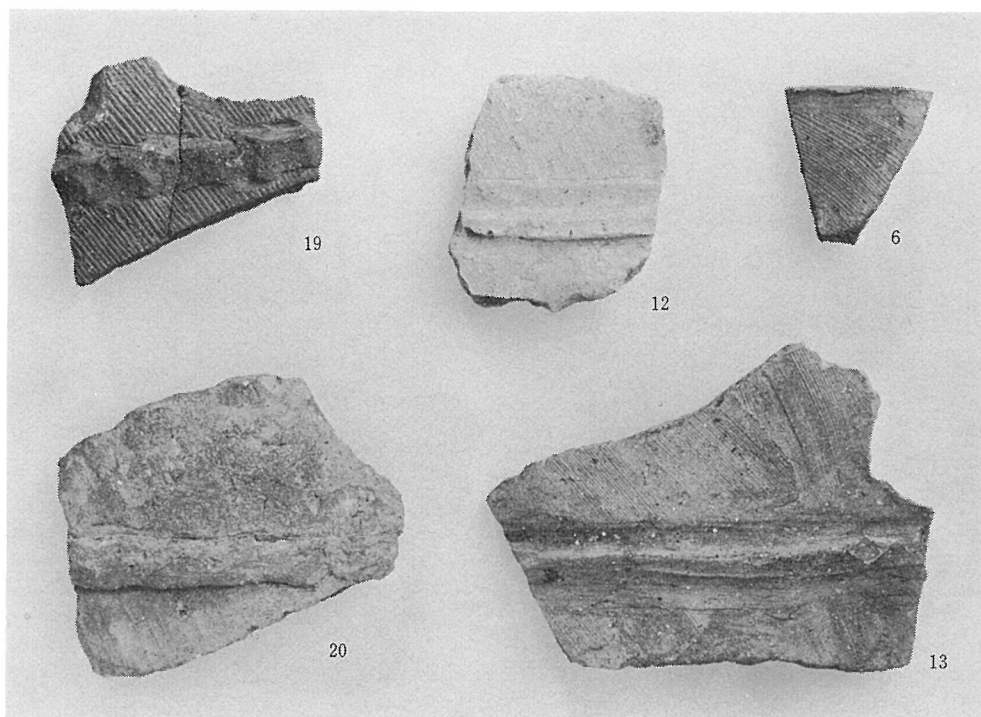
継体天皇三島藍野陵の前に位置する見張所(三島部事務所)の改修を行うことになり、昭和五十九年十月二十四日から二十六日までその基礎

部、および隣接する浄化槽設置部分の掘削に立会った。

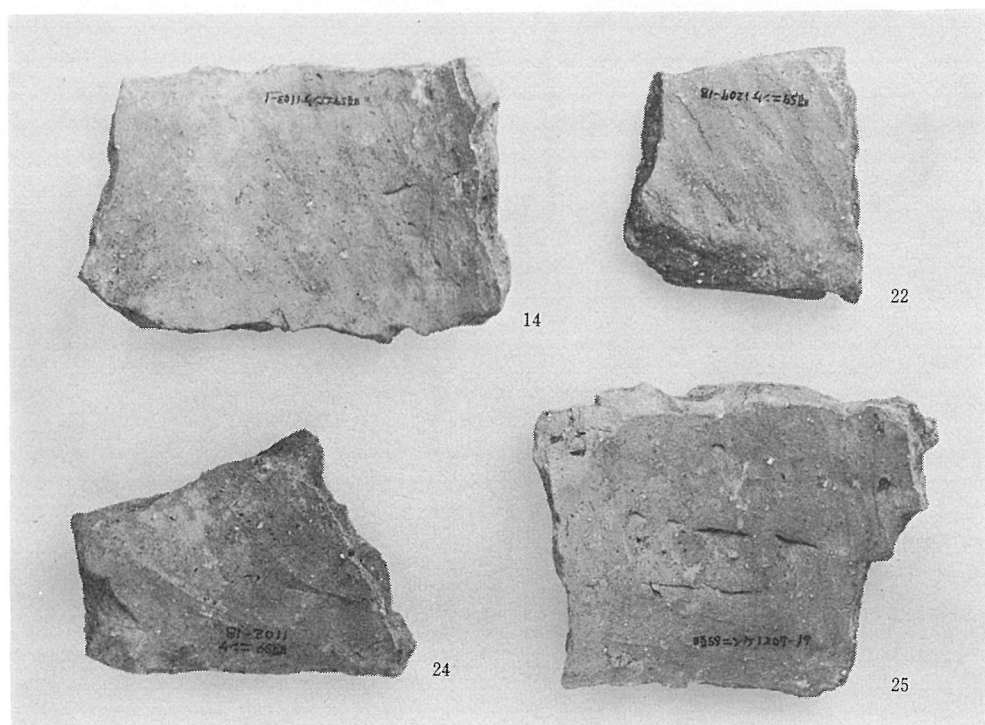
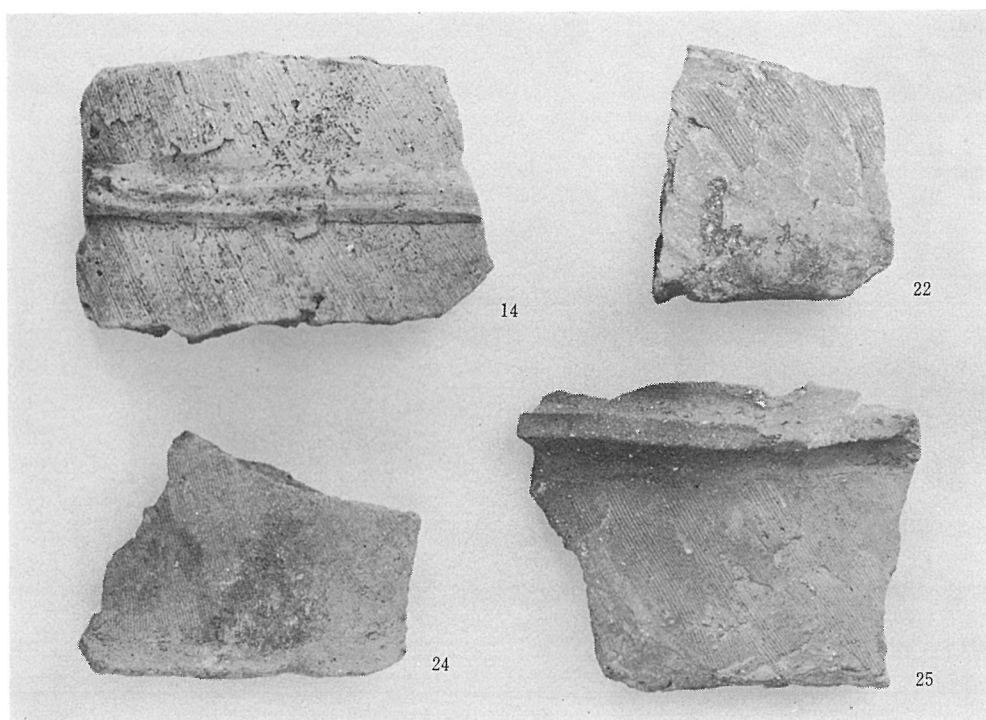
当所は、陵前の一般拝所の東隅にあたる部分で、旧見張所を撤去した跡地である。隣地は、近年まで水田として利用されており、一部にその名残りをとどめている。拝所部分は、これらの水田面より七〇～八〇センチ高くなっている。調査区域は見張所改修部分(三・三×三・三メートル)の周囲を約五〇センチ幅で三〇センチ程掘削したほか、東隅に新たに設ける浄化槽設置部分(一・三×一・三メートル)を約一・二メートル



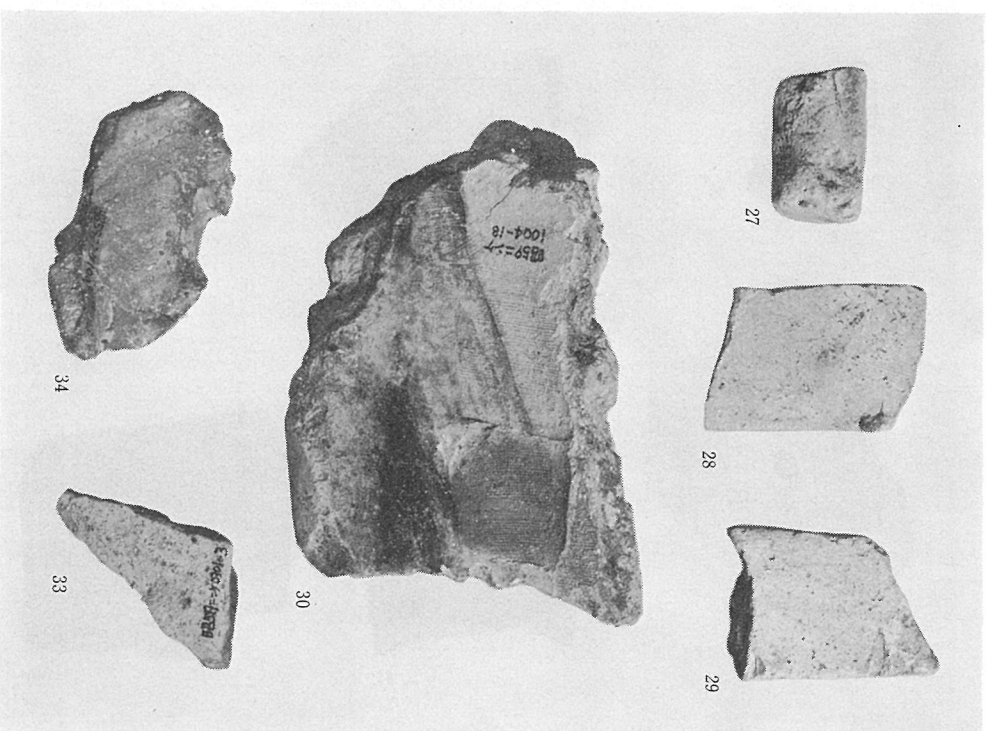
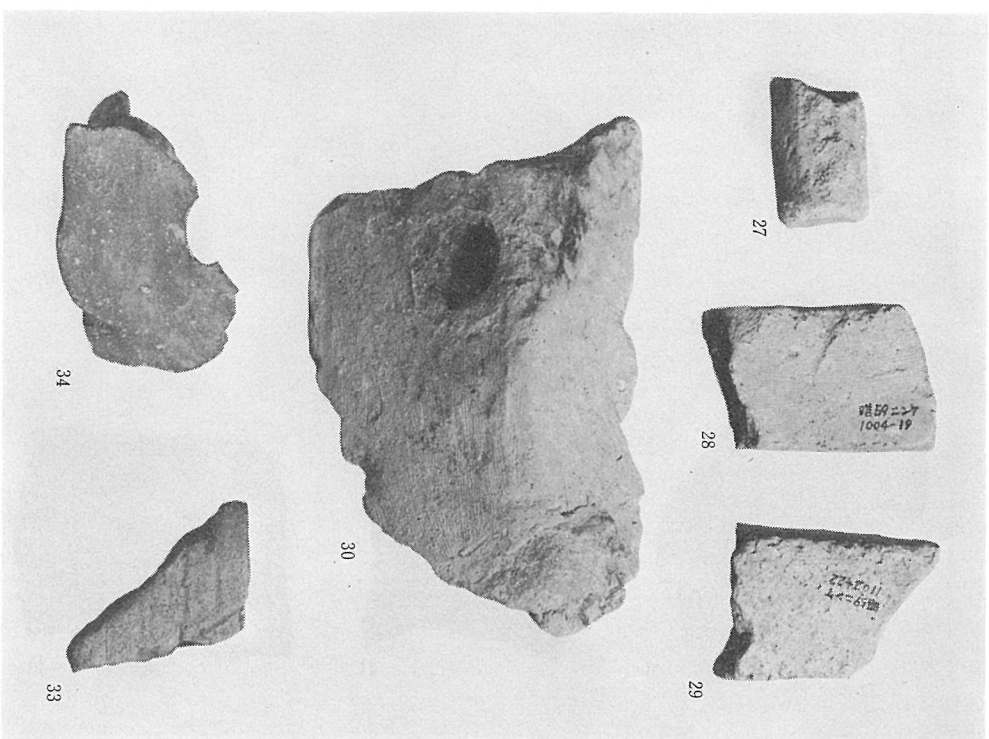
第14図 三島藍野陵調査箇所(○印部分) (1/2400)



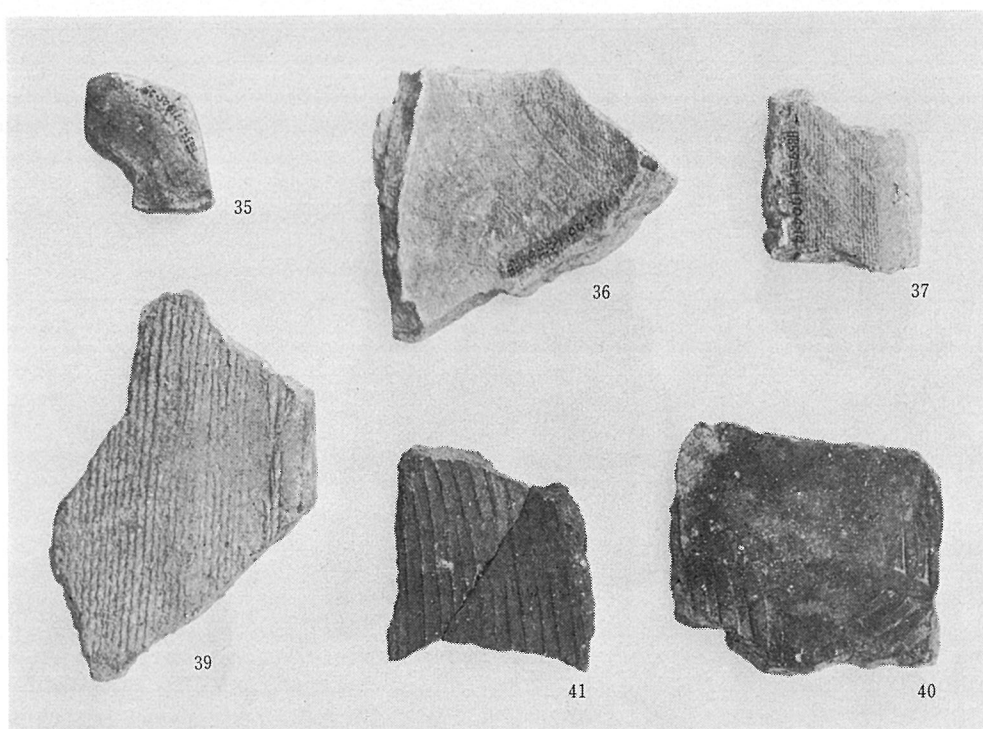
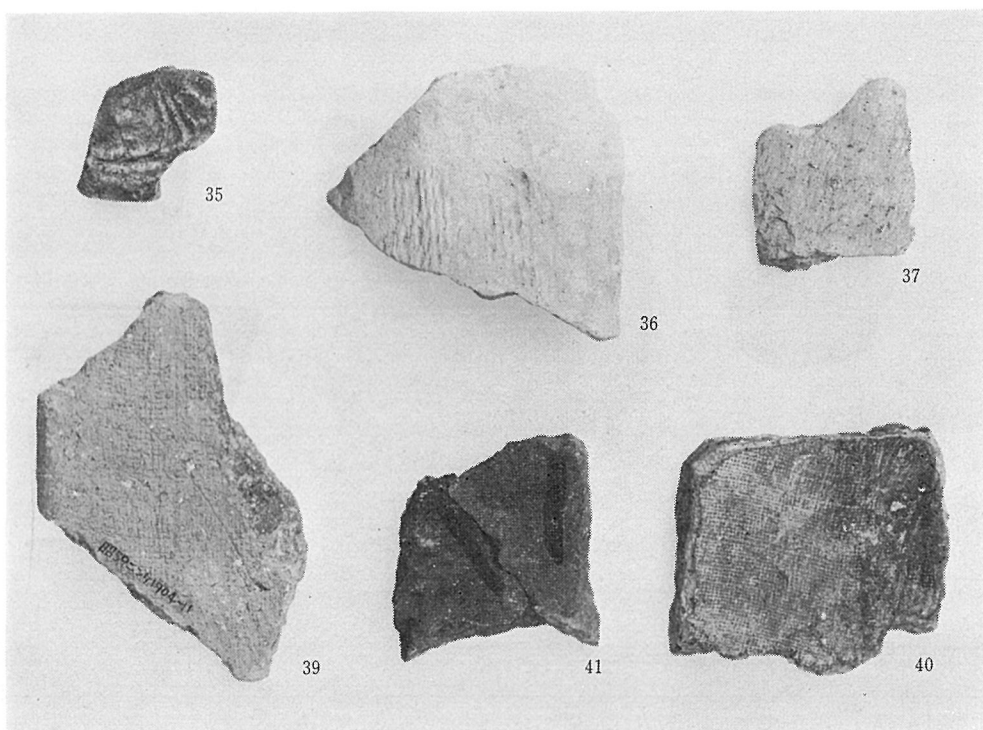
埴生坂本陵本地の出土品(1) (上 外面, 下 内面, 約1/3)



埴生坂本陵本地の出土品(2) (上 外面, 下 内面, 約1/3)



埴生坂本陵本地の出土品③ (左 外面, 右 内面, 約1/3)



埴生坂本陵陪冢の出土品(1) (上 外面, 下 内面, 約1/3)